



文の京 (ふみのみやこ)

区報 ふみきよ

発行/文京区
編集/オリンピック・パラリンピック
担当
〒112-8555 文京区春日1-16-21
代表 ☎ (3812) 7111
<http://www.city.bunkyo.lg.jp/>

オリンピック・ パラリンピック こども 新聞

2019年(令和元年)
12月27日 第8号

各面の内容

- 2 フェンシング
- 3 パラバドミントン
- 7 男子チア 迫力満点



—SHOCKERS提供

オリンピック・パラリンピックこども新聞は、こどもたちが記者になって取材や写真撮影に取り組み、みなさまにおとどける新聞です。

おりひめ 速い うまい



こども記者のインタビューを受ける日本代表の秋山なつみ選手(左端)、キルケリー監督(右から2人目)、多田仁美選手(右端)

味の素ナショナルトレーニングセンター(東京都北区)で11月17日、熊本県で開催される2019女子ハンドボール世界選手権大会に向けて練習するハンドボール女子日本代表(愛称・おりひめJAPAN)への取材を行いました。初めに、デンマーク代表選手とのミニゲームの様子を見学。デンマーク勢は身長が高く、日本を圧倒するものだと思っていました。相手の速いパス回しにも、しっかり対応できていました。文京スポーツセンターは東京2020大会のハンドボールの練習会場として使われます。(高2/K・S)

ハンドボール女子日本代表

松やに滑り止めに

僕たちは日本のトップ選手が集まる「味の素ナショナルトレーニングセンター」でハンドボール日本代表の選手を取材しました。

コートの上からはシュートは入れにくいので、ディフェンス側は背の高い選手をコートの真ん中の方に

基本をしっかり、たくさん練習

私たちは、ハンドボール日本代表のウルリック・キルケリーさんと、多田仁美選手、秋山なつみ選手にインタビューしました。上手になるために、大切なことについて、多田選手は「基本をしっかりやること。つらくてもにげないこと」と答えてくれました。私は、バスケットボールを習っています。いつも、「基本練習をしっかりやりな

い」と言われます。基本があるから、応用したプレーができるのです。秋山選手は「だれよりも練習してきました。他の上手な人のプレーをみて、学ぶことも大切だと思います」と答えました。基本をしっかり、たくさん練習、人のプレーを見て学ぶという学んだことを生かして、バスケットを上達したいです。

(小5/水島希)

攻守がいきが変わる

私は味の素ナショナルトレーニングセンターで女子ハンドボール選手の練習風景を見学しました。

初めて知っておどろいたことが二つありました。一つ目はベタベタしている松やにを手につけ、ボールを滑りにくくすることです。でも手やゆかがよごれるため学生は両面テープなどをかわりに使うそうです。二つ目は、「スピーディー」ということです。アスリートだと時速100キロほどで投げるそうです。そんな速さのボールを体を使って止めるなんて、とても痛いらしいと思いました。試合の展開も速いです。攻守がいきが変わり、流れが変わるのも見どころです。早くて3秒で点が入るところや点が入りやすいところ(1試合で40点のこと!)が、ハンドボールのみりよくだと、選手はおっしゃっていました。

(小6/福田心美)



相手に向かっていく多田仁美選手
—日本ハンドボール協会提供

身長の高さもなんの

ハンドボールのデンマークの選手は背が高く、からだもがっちりとしていました。日本の選手は背が小さかったですが、行動がすばやく、とてもよいテクニックでした。背の差はありましたが、デンマークの選手に勝っていました。日本の選手はいろいろな努力をしていると感じました。

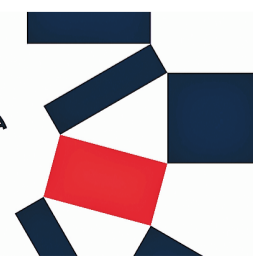
協会の方はルールを教えてくださいました。足を使えるのは、キーパーだけ。以前までサッカーにとても似ているスポーツだと思っていましたが、あまり似ていないのかなと思いました。インタビューでキルケリーさんからは、選手が楽しいと思える練習をする、と話していました。楽しい練習をしているのでどんどん練習をやりたくなっていて、とても上手になるのかなと思いました。(小5/田口星那)

長身、左利きが有利

女子ハンドボール日本代表の選手がデンマークの選手と練習試合をしていました。世界選手権のために背の高い方々を相手にしていました。ハンドボールで欲しいのは背が高く左利きの選手。背が高いと高いボールを、ブロックできます。シ

ュートの時に左側だと右利きが、右側だと左利きが投げやすく、日本人は右利きが多いので、左利きが欲しいそうです。ハンドボールは学校でやったことがありますが、一流選手の動きはとても速く、体力の維持時間が長いのでとても尊敬しました。(中1/C・Y)

教育プログラム
[よい、どん!]



初挑戦

12月8日、文京スポーツセンターで第11回太田雄貴杯フェンシング大会が開催されました。私たち子ども記者は、リオデジャネイロオリンピック男子サーブル代表の徳南堅太選手と、太田雄貴・日本フェンシング協会会長にインタビューしました。（高2/K・S）

フェンシング

子ども記者のインタビューを受ける徳南堅太選手



素早い決断力が大事

初めてフェンシングを体験しました。テレビで見たことはあり、とてもかっこよく、楽しみにしていました。ルールは簡単で「剣で相手を突く」だけでした。実際にやってみると素早い決断力が必要で、迷っているとすぐに突かれてしまいました。でも、相手がどんな動きをするのか心理戦でも考え、素早く動くのが面白かったです。（小6/福田心美）

自分を信じ もっと上手に

楽しいが一番

徳南選手に取材しました。「リオオリンピックの出場選手を決める大会でガチガチにきんちょうしましたが、勝って自信になりました」と話してくれました。自信があれば何でも楽しくなります。楽しくなれば、もっと練習する。練習をすれば、さらに自信につながります。自分を信じることは、上達につながると思います。（小5/水島希）

起源は「戦争」

フェンシングは意外とつくのはむずかしかったです。けれどついたらすごくうれしかったです。つかれてもあまりいたくありませんでした。フェンシングはもともとは「戦争」などからうまれたそうです。だから「今日死ぬかもしれない」というかごでやっているそうです。そしてすごく頭を使い、相手のうごきを予想してついたりします。ルールもむずかしくなく、たのしいスポーツで、すごくおもしろいことがわかりました。（小4/大迫輝）

剣道との違い

ぼくはけん道を習っていて、体験する前はフェンシングもけん道と同じようなスポーツかなと思っていましたが、そこまでにたスポーツではありませんでした。なぜなら、けんも全くちがうし、けん道は切るかんじだけ、フェンシングはつくようなかんじだったからです。でもフェンシングは楽しかったのでまたやってみたいです。（小4/内田悠太）

団体戦の勝利

体験会でスマートフェンシングを体験しました。相手より先にさきにぼうをどうたいにあて、先に3刺取った方が勝ちというゲームで、とても楽しかったです。とくなん選手に試合で一番うれしいしゅんかんをきくと「特にうれしいのは団体戦で勝ったとき。よろこびをみんなでわかちあえる」と答えてくれました。（小5/坂本史奈）

アスリート魂

フェンシングにおける「アスリート魂」を太田会長、徳南選手に聞きました。太田会長は、練習を重ね、本番にやり残したものが無いようにする▽自分自身を知り相手を知る——との答えでした。徳南選手は、ベストを出すためにたくさん練習し、コンディションを一番良い位置に持ってくる、でした。全力を尽くす重要性を知りました。（中1/尾崎由佳）

選考に英語試験

太田会長に代表選手選考における英語民間試験の導入にどんな思いを込めたのかを質問しました。「大会の開催地などでのコミュニケーションに困らないようにするため」、そして「選手引退後の教養になるから」という答えでした。（高2/K・S）



体験会では、子ども記者が徳南選手に挑んだ

やり残しなしで

ぼくは空手をやっています。試合をする時に、相手を研究したり、体調、やり残したことがないことが大事とわかりました。空手の試合をする時、これを大事にやりたいと思います。また、スポーツがうまくならない時、勉強もいっしょにやったほうが、力をほっきできることがわかりました。フェンシングをやってみてきつくてつかれることがわかりました。けれど、勝った時は気持ちいい。（小4/今津利康）

達成感と喜び

フェンシングを実際に行っていると、相手がどこから、どのように攻めてくるのか、予想するのがむずかしかったです。だから点をとれたときには、大きな達成感を感じることができました。団体戦で行うと、勝ったときの「達成感」と「喜び」というものをみんながわかち合うことで、この気持ちが倍になったような気がします。（小5/M・U）

徳南堅太選手、太田雄貴・協会会長にインタビュー



言葉、障がいこえて楽しむ



パラバドミントンのイギリス選手団にインタビューするこども記者

文京総合体育館で11月10日、イギリスのパラバドミントンのジャック・シェパード選手、クリステン・クームス選手、マティーン・ルーク選手、そして、ダニエル・ベゼル選手取材しました。初めてバドミントンをやった時、とても楽しかったから、選手になろうと思ったそうで

力強いショット

す。またバドミントンは、みんなが楽しんで良いと言っていました。
実際に選手と打つと、やはり、力強いと思いました。私は学校で昨年バドミントンをラブでした。本当の選手とバドミントンができて、とてもうれしかったです。
(小5/小貴美佳)

パラバドミントンイギリス代表選手に取材

世界1〜6位とプレー

毎日練習している、イギリス人のパラバドミントン選手

なるそうです。

4人にインタビューしました。朝9時。もう練習が始まっています。火、木曜日はジムでトレーニング。それ以外の平日はコートでラケットをふります。月1回程度は栄養や心の支えなどのセッションをおこないます。これでパラノスのとれたトレーニングに

2012年のロンドン大会でパラリンピックが注目され、関心が深まっているそうです。そんな世界ランキングが1〜6位の選手とバドミントンをしました。変な方向に飛んだ球もすべてうけとめ、こちらに返してくれたり、やさしく遠くへ飛ばすコツを教えてくださいました。サーブの時は一緒にやってくれました。パラスポーツは言葉と障がいをこえて楽しめます。
(小6/久保田壮太郎)

パラバドミントン



選手の障がいの程度により、車いす2、立位4の6クラスに分類される。ルールは基本的には通常のバドミントンと変わらないが、車いすと下肢障がい(SL3)のクラスはシングルスのコート半面で戦うなど特有のルールがある。



(小6/久保田壮太郎)

会場に音楽 理由は?

東京2020パラリンピック競技大会で初めて正式種目になるパラバドミントンのイギリス選手団に取材しました。彼らは月曜日から金曜日までの朝9時から夕方5時まで練習を重ねています。その練習風景を見て、私は音楽がかかっていることに気づきました。普通なら、音楽で集中力が欠けるため、かけないほうがよいはず。なぜ? 気になって質問し、とても驚きました。

理由は三つ①モチベーションを上げる②ガヤガヤになれる③楽しい気分にする、です。②は大会が関係します。会場はたいがいガヤガヤしていてさわがしいです。そこで選手たちは試合をし、自分の実力を全て出し、勝たなくてはなりません。だから音楽をかけるそうです。③はアスリートとしての大変さを軽減させるためです。ほとんど毎日の大変で苦しい練習を乗り切るために、楽しい気分になっているのです。

バドミントンをする選手たちはこやかで、フレンドリーで、私がミスをしてもらいやな顔一つせず、シャトルを拾ってくれました。逆に、私がよいショットをすると、「NICE!」と笑ってくれる。選手たちはつらい練習をしながらも、小さい幸せを見つけて、今の生活を楽しんでいて素晴らしいと思いました。
(中1/尾崎由佳)

正式種目を夢見て努力

「パラバドミントン」が初めて正式種目に決まったときの気持ちを、イギリス代表選手に聞きました。とてもうれしかったそうです。背景にはアマチュアスポーツとしてあつかわれ、まわりの関心が少なかった過去がありました。正式種目になり、まわりのサポートも受けやすくなって、やっと自分が一人前の選手になれたと感じたそうです。ほかにも新しく追加されたスポーツは、それぞれの選手が正式種目になるの

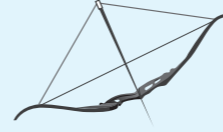
を夢みて努力した結果だと感じました。

実際にバドミントンをする、最初は、シャトルをとばすこともできず空ぶりばかりでした。しかし選手に1対1で指導され、終了まぎわには、5回ほどラリーが続くようになりました。とても楽しかったのですが、体験後、ラケットでうち続けていた右手が、急な痛みにおそわれました。この記事を書いている間もいたかったです。こんなハードな練習をまいにち7時間以上も行っている選手は本当にすごいと思いました。
(小6/福田心美)

口で弓を引き



50先の的を射る



狙うは金メダル



矢が厚い木の板を貫通——。こども記者6人が7月25日、文京総合体育館3階弓道場で、東京2020大会での優勝を目指すパラアーチェリー選手の永野美穂さんに取材しました。



口で弓を引く永野美穂選手



永野選手（右から3人目）と写真撮影するこども記者

結果よりも
努力が大切

パラアーチェリー 永野美穂選手インタビュー

今できることを

心の支えは「応援してくれるいろんな人」です。一生懸命、頑張る人には人が集まってきて、つながります。「頑張っていたら応援したい」と自分でも思うから、頑張ることができる、と言っていました。来年の東京2020パラリンピックに向けて「ロンドンでは5位で表彰台に立てなかったため、今回は一番良いメダルをとりたい。後で後悔しないために今できることをしっかりする」と心構えを語りました。（小6 / 川真田千偉子）

正直になる

永野選手は「点を気にしていると、大切なことを忘れてしまいます。結果よりもそのために起こった努力の方が大切」と、パラアーチェリーを楽しむことを心がけています。どのようになら打つか、打とうか、打ちたいか。いいときも悪いときも正直になることを大切にしている永野選手。東京2020パラリンピック競技大会での金メダルを目指しています。（小6 / 久保社太郎）

集中し楽しめる

永野選手は自分のできるスポーツを探していて、知人に誘われてパラアーチェリーに出会いました。パラアーチェリーのいいところは、真ん中に当たると気持ちがいいこと、集中して楽しめること、障害があってもいろんな人が楽しめることだそうです。（小6 / 森美由紀）

応援を支えに

パラアーチェリーは50先はなれた的を狙い、矢の長さで決まる競技で、アーチェリーとは、矢の長さや矢の重さが違うだけです。「体が悪いことを言い訳にするのは良くない。心が折れそうになることもあるけれど、アーチェリーがあって、いろいろな人に応援してもらっている」と話していました。（小6 / 井上晴貴）

板2枚を貫く

永野選手は20歳前後に原因不明の病気になり、左腕がまひしました。パラアーチェリーに出会い、しこうさくごし、たどりついたのが「口で弓を引くこと」。私が手で弓を引くと、とても重く、もし口で引いたら歯が折れてしまいそうでした。永野選手の打った矢はとても速く、木の分厚い板2枚を矢先がかんつうしました。（小6 / 奥津百花）

細部までこだわって

一番驚いたことは新聞の左上に書かれている版の番号が若ければ若いほど、早く刷られたものであることが分かります。次からは気にして読んでみようと思います。シアン、マゼンタ、イエロー、黒の4色から新聞ができていくのにも感動しました。普段何気なく読んでいた新聞は細部までこだわって作られていることが分かりました。（高2 / 岡村雅心花）

新聞づくりおもしろい！

原料紙は北海道から

一番ところにのこったのは、しんぶんになるまきとり紙のことです。時間になると、ロボットにはこぼれて自分のいちにいくのがすごかったし、まきついている紙をのぼすと14キロもあるし、重さは一つ1トもあるからです。しかも、それが何個も、北海道から、船や飛行機でおくられてくるときいてびっくりしました。（小4 / 諸見達人）

オリンピック目指し

この会社は今年で67周年です。はしりたかとの選手もいます。さとう・りょう選手です。身長は183センチです。今はオリンピックに向けて練習しているそうです。会社の中には、お風呂やベッドもあります。一番びっくりしたのは食堂がドラマなどのさつえいに使われているということです。（小6 / 中村美尋）

1秒間に36部つくる

夕刊を印刷しているところを見せてもらいました。とてもはやいスピードで印刷されていました。1秒間に36部もつくるそうです。ここでは40紙も印刷するそうで、中には自衛隊の新聞などもあり、面白そうだなと思いました。たくさんの方が協力しながら新聞をつくっていて、とても楽しかったです。（中1 / 諸見真織）

印刷会社を取材

8月21日、印刷会社（東京都）に取材に行きました。この会社は、毎日新聞の系外社で、現在は全国に六つの工場があります。オリンピック・パラリンピックこども新聞もここで印刷しています。（小6 / 佐々木将太郎）

開いた扇がモチーフ
セレモニーには小池百合子都知事やパリンピアンなどが出席しました。初公開されたメダルのデザインは「世界に吹く風と人々の思いを束ねる意味で、開いた扇がモチーフになっています。目の不自由な選手にもわかるように点字で金、銀、銅が書かれています。いろいろな工夫がなされていて、いいなと思いました。（小6 / 井上晴貴）

東京パラリンピックの開幕1年前をPRするカウントダウンセレモニーが8月25日、東京都渋谷区のNHKホールで開かれました。セレモニーでは東京パラリンピックのメダルのデザインが初めて発表されました。（小4 / 内田悠太）

東京パラリンピック 1年前式典



こども記者と記念撮影する根木さん

あきらめず「できる」と思うことが大切

セレモニー前に、私たちこども記者は車いすバスケットボール元日本代表の根木慎志さん(55)にインタビューしました。（小6 / 小野寺海友）

社会が障がいを作る

根木さんのインタビュー記事では「見えた社会が障がいを作っている」と言葉が心に残り、質問しました。答えをしょうじます。例えばエレベーターがないビルでは、車いすの方は上の階に上がるために階段を使わなければいけません。そこで初めて車いすの方にとっての障がい生まれてしまつたのです。つまり、社会は障がいを作っている。でも、逆に社会は障がいを作らないこともできます。根木さんは、このことを伝えたかったのでないでしょうか。（小5 / M・U）

心のコントロール

根木さんに「ブレる時に一番大へんなど」と聞くと「気持ちです。」



セレモニーではメダルも発表された。金・銀・銅は裏面 © TOKYO 2020

小・中学校ではサッカー

根木さんは小・中学校ではサッカーをやっていたが、高3でけがをしてしまいました。そのときはスポーツができなくなりましたが、車いすバスケットを始めてパラリンピック・シドニー大会にキャプテンとして参加することができるようになりました。「あきらめず『できる』と思うことが大切」と根木さんは言っていました。（小6 / 久保社太郎）

シュートが決まった時

私は根木さんに聞きました。「車いすバスケットをやっている時、一番うれしいことは何ですか?」答えは「シュートが決まった時」でした。私はオリンピックもパラリンピックも、シュートがはいった時のうれしさはわからないんだなと思いました。私はこれから、パラリンピックにもきょうみをもちたいと思いました。（小4 / 洲巻文緒）

持心のコントロールとおっしゃいました。うまくいかなかった時は心細くなって、あせって、ふんは気が悪くなるものです。そこで「だれかが『気持ちよくなりなさい』と言ってくれる、がんばろう」と思える。「思うようにいかないことを楽しむ」という根木さんの言葉が一番心にひびきました。（小4 / 内田悠太）

根木さん「インタビューしてびっくりしたのは、食事を1日6回とっていること。練習するだけ食べて、夜はあまり食わないでバランスよく食べているそうです。一番うれしいことはシュートを入れた時。そして応援してもらったことでも心強くて話していました。車いすバスケットは難しく大変で、けがにも負けずにパラリンピック選手として活躍したことにとても感動しました。（小6 / 関根里佳）

食事は1日6回も

柔道・全日本男子の井上康生監督を抑え込みにかかるこどもたち

抑え込み

イッポン!



柔道二ツポン 強さの秘密



楽しく
続けよう



2019世界柔道選手権東京大会を控えた8月6日、文京シビックセンターの区民ひろばで「文京シビック柔道教室」が行われました。柔道・全日本男子監督の井上康生さんと全日本女子監督の増地克之さんによるスペシャル指導。教室後には、二人の監督にインタビューしました。

おいしく 楽しく食べる

いのうえかんとくは、食生活で気をつけていることを「おいしい、楽しいと思って食べることや、お母さんお父さんが作る料理が一番バランスがいいので嫌がらずに食べることが大切」とおっしゃいました。これからは全部残さず食べようと思いました。選手には、ちょうしがいいときはあまり声かけしなくていいけど、ちょうしがわるいときやまけたときに声かけするそうです。ぼくもかんとくになつたらいのうえかんとくのようなことを選手たちに教えたいです。

(小4 / 諸見逞人)

足を工夫して技を

じゅう道をしているところを実際に見学して、じゅう道にはコツがあると思いました。まず地かんとくは「足を工夫して使うとわざがうまいく」と、井上かんとくは「楽しくじゅう道をつづけてください」と言っていました。

(小5 / 小貫美佳)

集中とリラックスと

全日本の選手達も練習以外の時には、音楽をきいたり映画を見たり、今はやっているものをやっているそうです。私たちと同じようなことをしているのだと思いました。集中する時は集中、リラックスする時はリラックスが大切だと学びました。

(中1 / 諸見真織)

選手の考え引き出す

増地かんとくが練習の時に気をつけていることは、選手たちの考えを引き出し、自分の考えは、あまり教えないということです。「試合は、自分の力を試すためにあるもの、じゅう道をもっと楽しくやってもらいたい」と両かんとくは話しました。

(小6 / 石井たまき)

生きがい 素晴らしい

井上かんとくは「柔道が生きがいです。現役の頃は勝つこと、今はかんとくとしてみなさんに知ってもらうことが生きがい」とおっしゃいました。私には生きがいがあるのか、何なのか、考えてみました。読書、おしゃべり……。考えて気づきました。たいてい人の生きがいは一つではありません。それを生きがいとよべるほど、がんばっていること、好きなこと、熱中していることがあるのは素晴らしいことです。

(小5 / 水島希)

自分を信じて全力を

井上、増地両かんとくから、それぞれが得意としている技を見せていただくと、とても迫力がありました。増地かんとくは選手に大切なのは「今まで練習してきた自分を信じて、試合で全力を出し尽くすこと」と話していました。僕なら絶対的な自信を持ってないと思うので、一つのこと何十年も打ち込むことがとても大切だと感じました。この精神を自分の日常生活でも生かしていければ良いです。

(小6 / 貝沼義礼)

全日本男子・井上康生監督 全日本女子・増地克之監督

女子チアと共演

男子のチアリーディングを見るのは初めて。えんぎはすごかったよくてびっくりしました。ほぼみんな、かみを青、赤、黄、緑にそめていました。一番すごいなあと思ったのは、女子と男子がいっしょにえんぎをしていたところです。高校生までサッカー部やテニス部だった人が多かったです。

(小4 / 大迫輝)

空中でジャンプ

ステージを見た時、女子のチアとちがいがとてもはくりょくがありました。ステージで空中でジャンプするところが、すごかったです。私はダンスをやっているの、SHOCKERSのようにあきらめないでさいごまでやりぬくようになりたいです。また、自分たちの力で人を動かすのがとてもすてきなと思いました。私もそういう人になりたいです。

(小4 / 寺島こと子)



ダイナミックなパフォーマンスを披露するSHOCKERSのメンバー
SHOCKERS提供

オリンピック1年前イベント

早稲田大 SHOCKERS

男子チア 迫力満点

早稲田大学の男子チアリーディングチームSHOCKERS（ショッカーズ）によるオリンピック1年前イベント「SHOCKERS FESTIVAL2019」が8月11日、文京シビックホール大ホールで開かれました。この日はオリンピック・パラリンピック要素を盛り込んだ12構成（演技）が披露されました。



演じる時は笑顔でSHOCKERS提供

SHOCKERS

早稲田大学男子チアリーディングチーム。2004年、第一文学部の学生だった狩野洋平さんがメンバー6人で創設。ネーミングには「男性だけのパワフルなチアダンスで衝撃を与えたい」という気持ちを込めたという。

今秋まで副代表を務めた3年の岡村希一さんによると、2019年のシーズンは選手50人、マネジャー7人の計57人で活動した。例年、米国開催を含むチアリーディングの大会に年2回出場。今年は本場米国でも長い歴史のある大会「National Cheerleaders Association (NCA)」に日本からも男子としても唯一、参加した。



メンバーと写真におさまるこども記者

高校では帰宅部？

ステージではさまざまな技を出していましたが、ステージ後、「シヨカネム、カトリーナさん、せみさん、モロッコさん、ドリモゲモンさんの4人に取材をしました。ステージ上では運動がとても得意そうに見えましたが、高校生の頃には帰宅部だったという人もいました。かっこよかったから入ったそうです。練習時間は1日4時間、週4日のほかに、土日はイベント、そして自主練をしていると言っていました。

(小6 / 内田里音)

映像を使い物語に

SHOCKERSは男性だけのチームです。そのため男性ならではの技を見せられるところが魅力です。印象に残っているのは、宙に人が投げられるところ。力を使った演技でかっこよかったです。他に心に残ったのは、映像を使って見ている人をあきさせないところです。技を披露するだけでなく、物語にすることで、とても楽しく、集中して見ることができました。私も人に印象を与えられるよう頑張りたいです。

(中2 / 安藤万博)

海外で「いいね」

本番は男子のチアにしかない迫力があり、夢中で見入りました。終了後、SHOCKERSの方にお話を伺いました。海外の大会ではいろいろな国のたくさんのチームがエントリーしていたけれど、男子のチームはSHOCKERSだけだったそうです。でも男子のチアの迫力や魅力をいいねと言ってもらったことが良かったと話していました。

(小6 / 井上晴賀)

彩り華やか

文京クリスマスマーケット2019

オリンピック金メダリストが来場

12月13、14日に文京シビックセンターと礪川公園で文京クリスマスマーケット2019がありました。ドイツ・カイザースラウテルン市から、ロンドンオリンピックの自転車競技の金メダリスト、ミーリアム・ヴェルテ選手も来ていました。ドイツ語で「メリー・クリスマス」は「フローエンス・フェスト」と言うそうです。(小4/大迫輝)

ドイツホストタウン情報

きずな深まるイベント

文京区でクリスマスマーケットが開かれる理由は、区がドイツと友好を保ち、東京2020大会のホストタウンになっており、ドイツの各地で行われる伝統的行事だからだそうです。ヴェルテ選手は「カイザースラウテルンではクリスマス前の5週間開かれる伝統的なお祭りで、人々のきずなが深まるイベントです」と話していました。(小6/久保壮太郎)

姉妹都市で多彩な交流

文京区とカイザースラウテルンは姉妹都市で、たくさん交流をしています。たとえば、ホームステイ生徒交換事業、カイザースラウテルン広場の設置などです。みどころは市庁舎や日本庭園などです。(小5/小貴美佳)



①文京クリスマスマーケット2019に訪れた親子連れ
②お店にはたくさんのグッズが並んだ



⑤点灯されたツリーの前でカイザースラウテルンについての説明を聞く子ども記者④クリスマスのイルミネーションに彩られた礪川公園

ガンバレ！東京ユナイテッドFC

試合観戦、選手とミニゲーム

小石川運動場で9月22日に関東サッカーリーグ1部「東京ユナイテッドFC VS 流通経済大学FC」の試合が行われました。東京ユナイテッドFCは区と相互協定を結んでおり、小石川運動場はそのホームグラウンドです。試合後、選手インタビューとミニゲームをしました。

恩返しのおいで

試合は東京ユナイテッドが前半は5-0と大きくリード、後半0-0で勝ちました。

目標はJリーグ

試合を見ている時、パスやキックの正確さやわざの細か

さかすかといっていました。今回インタビューを行った伊藤光輝選手、岡庭裕貴選手、監督・福田雅さんの目標は、Jリーグに昇格することです。東京ユナイテッドFCがJリーグに入れるように頑張りたいです。(小6/菊池一輝)



③子ども記者のインタビューを受ける伊藤光輝選手
④東京ユナイテッドの選手の指導でサッカーにチャレンジする子どもたち

東京ユナイテッドFC
2015年1月、慶応義塾体育会サッカー部と東京大学運動会ア式蹴球部のOB有志が「LB-BRB TOKYO」の名前で創設。16年に関東サッカーリーグ2部。17年に関東1部リーグ昇格と共に現在の名前に。18年に3位入賞。19年は2位。

※画像の一部を加工しています。

一番うれしいのは点を取ったとき

試合はとても迫力があり、井上大選手のディフェンスがすごかったです。キャプテンの伊藤光輝選手は、サッカーはようちえんのころからやっており、一番うれしい時は、点をとった時だそうです。でも「みんながパスをつなげてできたゴールなので自分だけのゴールではない」とおっしゃっていました。一番たいへんな時は、負けたチームを立てなおす時だそうです。

監督の福田雅さんは「選手たちに点をいっぱいってほしい、Jリーグに出てあいされるクラブになってほしい」と言っていました。監督が一番選手に教えていることは「気合」だそうです。

ミニゲームもやりました。選手たちは強く、全く点をとれませんでした。でもあとから点をとれるようになりました。24番の鈴木大河選手のヘディングはすごく、高くとんでいました。(小4/大迫輝)